

主語の文体論

— クライストの『決闘』を中心にして —

廣川 智 貴

1. はじめに

本稿の目的はハインリヒ・フォン・クライスト(Heinrich von Kleist, 1777-1811)の短編『決闘(Der Zweikampf)』(1811年)の統語構造を文体論の立場から分析することにある。ここでいう文体論とは言語学と文学の求心力として発生した現代文体論をさす。一言でいえば、文学的テキストを言語学が提供する枠組みで分析する学問領域であるといえよう。¹ 本稿では統語構造をおもにいわゆる主語の観点から論じる。あとで述べるように、主語は一般に考えられているほど単純ではないし、それだけで独立して機能しているわけでもなく、テキストにおけるさまざまな要素と関連している。要するに、一般に主語とよばれる現象は主語という名称だけでは覆いつくすことができないものなのである。わざわざ「いわゆる」主語と書いた所以である。したがって、主語以外の諸要素にも当然のことながら言及することになるだろう。

『決闘』は『拾い子(Der Findling)』(1811年)と同様に『物語集(Erzählungen)』の第二巻(1811年)にのみ伝わる短編で、それにさきだって『ベルリント刊新聞(Berliner Abendblätter)』に掲載されたアネクドート「奇妙な決闘の物語(Geschichte eines merkwürdigen Zweikampfes)」(1811年)によるものとされている。本稿であつかうのは『決闘』の冒頭のごく一部分であるが、作品全体を解釈するうえで重要な箇所を抜粋したつもりである。つとにB・ウスペンスキーが指摘しているように、芸術テキストには「枠」が存在する。文学テキストに関していえば、テキストの「始め」と「終わり」がその枠を形成するといえよう。ウスペンスキーのいうように、「枠」が「現実の世界から表現されたものの世界に移る移行の過程」² であるとするならば、われわれ読者は小説の「始め」において現実世界から虚構世界への入り方を知るといえよう。その意味で、たとえ冒頭の一部の抜粋であっても、解釈のための鍵を得ることができるはずである。小説の始まりは終わりでもあるといわれるのはそのためであろう。現代の文体

¹ 文体論についての詳細は、以下の拙論を参照のこと。廣川(2000)

² ウスペンスキー(1979)

論の創始者であるL・シュピッツァーがそうであったように、たえず部分と全体との関連を視野にいれさえすれば文体分析も作品の理解に寄与することができるのではないだろうか。なお、『決闘』の梗概は以下のとおりである。

時代は十四世紀。ヤーコブ赤鬚伯は、腹違いの兄であるヴィルヘルム・フォン・ブライザハ公爵を暗殺した、と告発される。しかしかれは事件のあった夜、未亡人リッテガルデと共にすごしていたと証言する。身に覚えのない未亡人のため、かれの恋人であるトロータ侍従が神明裁判に訴えて赤鬚伯と決闘するが、かれは重傷を負わされて敗北する。しかし奇妙なことに、トロータの傷はその後全快し、しかるに、伯は軽傷が悪化して瀕死の状態におちいることになる。やがて、神を欺いた偽証罪で恋人たちは処刑されることになるが、その刑場にあらわれたヤーコブが、リッテガルデだとおもいこんでいた女がかれの小間使であるロザリーエであったこと、ブライザハ公の暗殺は自分が送りこんだ刺客によるものであったことを告白して死ぬ。ふたりの恋人は名誉を回復し、皇帝は律令に「もしも、それが神の御心ならば」と挿入して物語はおわる。

2. 主語—その機能と形式

主語はわれわれにとってもっとも馴染みのふかい概念のひとつであろう。歴史的にも古く、古代ギリシアと古代ローマの文法においてすでに考察の対象とされていた。それによると、節にはかならず主語とされる要素がひとつふくまれていなければならない。それほどまでに主語は重要な概念なのであるが、この機能を明確に記述することは困難であるといわなければならない。したがって、主語の形態と機能をすべて記述することはあらかじめ断念しなければならない。ここではテキストの文体分析において有効とおもわれる分類のみを概観してみることにしたい。

2. 1. 主語の分類

文には命題がふくまれている。そしてその命題は指示(Referenz)と陳述(Prädikation)によって構成されている。³ この指示こそ文中において名詞が果たす基本的な機能であるといえる。指示機能はおもに主語にゆだねられるので、ドイツ語では主語は義務的成分としてあつかわれる。⁴ 主語の機能的分類は一見問題がないようにおもわれるが、その機能は慎重に分析されなければならない。たとえば、H・J・ヘリンガーは主語の特徴をつぎのようであるとする。

(1) 主語はしばしば文のテーマをさす。

³ Heringer (1989: 71)

⁴ ebd.

(2) 主語はしばしば原因となった人あるいは行動する人間をさす。

(3) 主語は主格であらわれる。

ヘリンガーによる分類は主語の基本的な機能を提示しているといえるが、これだけでは十分とはいえない。さらに詳細な補足が必要であろう。その意味で、機能文法の第一人者であるM・A・K・ハリデーによる分類はより包括的なものでヘリンガーを補うに十分であるようにおもわれる。ハリデーは言語の機能的側面から主語についてのべているが、⁵ かれはまずこれまでの主語に関する議論を総括して、主語を以下の三つに分類している。すなわち、(i)「心理的主語 psychological subject」、(ii)「文法的主語 grammatical subject」、(iii)「論理的主語 logical subject」がそれである。

(i) 心理的主語は、「それについてメッセージが発せられるところのもの」を意味した。これが「心理的」とよばれたのは、それが話し手が節の産出にとりかかるときにまず心のなかにもつものだと考えられたからである。

(ii) 文法的主語は、「議論(陳述)の真偽が委ねられるもの」を意味した。これが「文法的」とよばれたのは、当時、「主語と述語」という構造が純粹に形式的な文法関係であると考えられたためである。この形式的な文法関係は、主語として機能する名詞や代名詞の格とか、主語と動詞との人称や数の一致などのような、さまざまな文法的特性を決定するためのものであると考えられたが、特定の意味を表現するためのものでは考えられなかった。

(iii) 論理的主語は、「行為をするもの」を意味した。これが「論理的」とよばれたのは、17世紀から「logical」という語がもっていた意味であり、記号と記号のあいだの関係であった「grammatical」とは対照的に、「物と物のあいだの関係にかかわりがある」という意味をしめすためであった。

さらにハリデーはこれらの機能をその性質に応じて別の術語で書きかえることを提案する。つまり、心理的主語は「主題(theme)」と、文法的主語は「主語(subject)」と、そして論理的主語

⁵ Halliday (1994: 30ff)

は「行為者(actor)」としてしめされる。⁶

これら三つの機能は節にもあてはまるとされる。ハリデーは節のもつ三つの異なる意味の領域を以下のように定義している。

(i) 主題というのは、「メッセージとしての節」の構造において機能するものである。節は、メッセージつまり一定量の情報としての意味をもつ。主題は、メッセージの出立点である。それは、話し手が、自分がこれからいわんとすることの「起点」として選択する要素なのである。

(ii) 主語というのは、「交換としての節」の構造において機能するものである。節は意味交換、つまり話し手と聴き手のあいだの意味のやりとりとしての意味をもつ。主語は、意味交換のための保証である。それは、話し手が、自分がいっていることの妥当性にかかわる責任を負わせる要素なのである。

(iii) 行為者というのは、「表示としての節」の構造において機能するものである。節は、表示つまり人間の内的・外的経験をなんらかの過程として解釈構築するものとしての意味をもつ。行為者は、その過程における活動的な参与要素なのである。それは、話し手が、なんらかの行為をするものとして描きだす要素である。

以上がヘリンガーとハリデーによる主語の分類のおおよそである。ヘリンガー、ハリデーの分類は一見単純におもえる主語がじつは種々の機能を備えていることを教えてくれる。そして、テキストの文体はこれらの機能を詳細に分析することによって浮き彫りになるようにおもわれる。要するに、いわゆる主語以上の三つの観点から考察されなければならないのである。以下では、おおよそこのハリデーの枠組みにそって分析をすすめてゆきたい。

3. 分析

3. 1. テキスト

⁶ 本稿においても基本的にはこの術語を採用する。

⁷ テキストからの引用は、Heinrich von Kleist, *Sämtliche Werke und Briefe. Band 2* Helmut Sembdner (Hrsg.), München 1994, S.232f.による。

(1) Der Graf der eben mit einer Gesellschaft von Freunden bei der Tafel saß, stand, als der Ritter mit der Botschaft der Herzogin, zu ihm eintrat, verbindlich von seinem Sessel auf (2) aber kaum, während die Freunde den feierlichen Mann, der sich nicht niederlassen wollte, betrachteten, hatte er in der Wölbung des Fensters den Brief überlesen: als er die Farbe wechselte, und die Papiere mit den Worten den Freunden übergab: (3) Brüder, seht! welch eine schändliche Anklage, auf den Mord meines Bruders, wider mich zusammengeschmiedet worden ist! (4) Er nahm dem Ritter, mit einem funkelnden Blick, den Pfeil aus der Hand, und setzte, die Vernichtung seiner Seele verbergend, inzwischen die Freunde sich unruhig um ihn versammelten, hinzu: (5) daß in der Tat das Geschloß sein gehöre und auch der Umstand, daß er in der Nacht des heiligen Remigius aus seinem Schloß abwesend gewesen, gegründet sei! 「公爵夫人の書面をたずさえて来訪した騎士がヤーコブ伯のもとにおされたとき、伯爵はちょうど気心のしれた連中と宴もたけなわであったが、いすから立ちあがって慇懃にこれを迎えた。しかし、伯爵の友人たちがすすめられても一向に席につこうとしない格式ばったその男を見つめる一方で、伯爵は張り出し窓のところにいって手紙にざっと目を通していた。とそのとき伯爵はみるみる顔色を変え、「諸君、見てみたまえ、なんという侮辱だ、無理にこじつけてわしに兄殺しの罪をきせてるぞ」と、友人たちに声をかけその手紙を渡した。伯爵は目を怒りでみなぎらせて、騎士から矢をもぎとり、自身の魂の破滅を隠しながら、友人たちが不安そうにかれのまわりに集まりだすや、こうつけ加えた。「たしかにこの矢はわしのものだ。聖レミーギウスの夜、わしが城をあけていたという事実も認めざるを得ない」と」。

聖レミーギウスの夜、ヴィルヘルム・フォン・ブライザハ公爵は何者かに暗殺される。その場に残された矢が調査の結果ヤーコブ赤鬚伯のものであるとゴトヴィーン宰相は公爵夫人に告げるが、公爵夫人は事態がこじれるのを恐れてそれを認めようとしなない。そして暗殺の根拠とされた矢と信頼の気持を記した手紙を使者に託す。その使者である騎士が赤鬚伯のところに到着するのが引用の場面である。

3. 2. 分析

3. 2. 1.

(1) Der Graf der eben mit einer Gesellschaft von Freunden bei der Tafel saß,

stand, als der Ritter mit der Botschaft der Herzogin, zu ihm eintrat, verbindlich von seinem Sessel auf (...)

この文は従属的複合文からなっている。形式的にいうと、主文、関係文(Relativsatz)、中間文(Zwischensatz)である接続詞文(Konjunktionalsatz)によって構成されている。主語である名詞句"der Graf"はその直後に述語動詞をとらず、関係文"der eben mit einer Gesellschaft von Freunden bei der Tafel saß"によって隔離される。関係文の後にようやく述語動詞の一部である"stehen"の過去形があらわれるが述部はまだ完結せず、同時性をあらわす副文"als der Ritter mit der Botschaft der Herzogin, zu ihm eintrat"がそれにつづく。そうしてようやく前つづり"auf"が文末におかれることで文は完結する。

このごく短い一文にすでにクライストに特徴的な文体を確認することができる。まず、最初にあげるべきは隔離された主語であろう。⁸ さきにみたハリデーの分類にしたがうならば、語り手が「わたしはこれから"der Graf"についてのべる」ことを暗示しているという意味で、"der Graf"は主題であり、主語であり、「立ちあがる」という動作をおこなう行為者でもある。また、ドイツ語においては前域(Vorfeld)は一文成分とみなされるので、それにつづく関係文をも主題にふくむことができよう。⁹ われわれ読者はとりあえずは隔離された主語によって語り手が語るであろう情報の焦点を先どりすることになる。と同時に、いわゆるテーマとレーマの関係でいえば、主語と述語動詞の距離がおおきく開くことで新情報であるレーマの提示が先送りされることになり、読者の期待と緊張を高める効果があることも付言しておこう。

"der Graf"を主題にして語り手は語りをはじめののだが、その主文ははやくも接続詞文"als"によって中断される。主文の主題がテキストの展開にとっておおきな意味をもつのはいうまでもない。しかし、主題はなにも主文にのみ存在するわけではないことにも注意しなければならないだろう。とりわけ、クライストのように主文においてはまれにしか重要な事態がおこらない作家であればなおさらのことである。¹⁰ したがって、副文における主題の展開をも考慮してはじめてテキストのもつ微妙なニュアンスを感じとることができるといえる。ただ、接続詞などによってみちびかれる副文の場合、構造的な主題と話題的な主題とを区別しなければならないし、¹¹ これがテキストの

⁸ 隔離された主語については以下を参照のこと。Conrady (1951: 86ff)、Turk (1968: 53ff)、Staiger (1948: 100ff)。また、隔離された主語という言語現象が、クライストの書簡形式のエッセイ「語りながら次第に思考をねりあげてゆくことについて(Über die allmähliche Verfertigung der Gedanken beim Reden)」との関連で語られることが多いことも記しておく。

⁹ vgl. Halliday (1994: 39-42)

¹⁰ Conrady (1951: 89)

¹¹ Halliday (1994: 61)

重要な特性をしめすことにもなる。"als der Ritter mit der Botschaft der Herzogin, zu ihm eintrat, (...) "において、前文との関係をしめす構造的主題は"als"であり、話題の主題は"der Ritter"である。"der Ritter"は"der Graf"とおなじく行為者であることにも注意したい（これについてはあとで述べる）。主文はこの接続詞文によって中断されるが、このような現象それ自体はそれほどめずらしいことではないし、誤りでもない。それというのも、時をしめす接続詞文はたいていは主文の前域か後域におかれるが、それがいわゆる中間文として主文の定動詞の直後におかれるということも十分可能だからである。¹² ここで注目したいのはむしろ、主題の転換が接続詞"als"によっておこなわれているということなのである。

時をしめす従属接続詞"als"によってみちびかれる接続詞文はごく日常的にもちいられるものであり、ここでとりたてて論じる問題がないようにおもえるかもしれない。しかし、クライストにあつては"als"による従属節がたんなる時間的な意味あいをこえることがある。

Sie kamen auch wirklich, indem man ihnen, bei solchen Anstalten, mit hinlänglicher Ehrerbietigkeit Platz machte, aus der Kirche heraus, und glaubten sich gerettet. Doch kaum waren sie auf den von Menschen gleichfalls erfüllten Vorplatz derselben getreten, als eine Stimme aus dem rasenden Haufen, der sie verfolgt hatte, rief: dies ist Jeronimo Rugera, ihr Bürger, denn ich bin sein eigner Vater! (157f) 「この剣幕ではさすがに手出しもできかねるとばかり、人びとが十分にうやうやしく道をあけるなかを一行はたしかに教会の外に出、これで救われたとおもった。ところが内陣とおなじく人でごったがえしている正面広場に達したかとおもった矢先、狂乱状態で一行をつけまわす一群のなかからある声があがった。「こいつがイエローニモ・ルゲラだ、皆の衆、わしがこいつの実の父親なのだから！」。

これは『チリの地震 (*Das Erdbeben in Chili*)』(1810 年) から引用したものである。段階をあらわす不変化詞(*Abstufungspartikeln*: noch, schon, kaum)や時をしめす副詞(*eben, schon*)とともに時をあらわす接続詞"als"が用いられるとき、ほんらいなら主として「過去における一回的事象の場合の同時」(小学館『独和大辞典』)を意味するこの接続詞は、主文から副文にかけて読者を多かれ少なかれ重大な意味をもつ出来事の転換へと導くことがある。ドン・フェルナンドの一行は聖職者のミサに扇動された人の群れからようやく逃れることができた。しかし、やはり人びとであふれかえった前広場にかれらが進むやいなや、思いもかけずかれらを追ってきた者から声

¹² Erben (1984: 67)

があがるのである。現在ただいまの瞬間とそれとはまったく性質の異なる別の瞬間の共存、そのような偶然的な出来事による状況の転換が接続詞"als"によって極度の緊張をもって表現されているのである。

さらにもうひとつ例をあげてみよう。

Eben stand er, wie schon gesagt, an einem Wandpfeiler, und befestigte den Strick, der ihn dieser jammervollen Welt entreisen sollte, an eine Eisenklammer, die an dem Gesimse derselben eingefügt war: als plötzlich der größte Teil der Stadt, mit einem Gekrache, als ob das Firmament einstürzte, versank, und alles, was Leben atmete, unter seinen Trümmern begrub. (145) 「すでにふれたように、かれは片蓋柱のそばに立っていたが、苦しみ多きこのうき世から解放してくれるこの縄を、蛇腹にしていたかすがいに結びつけた。と、そのときのことである。あたかも天空がざざっと落ちこんできたかとおもったほど、町の大部分は一大音響とともに沈んで、生きとし生けるものはことごとく瓦礫のなかに埋まってしまったのである」。

これもおなじく『チリの地震』からの引用で、主人公イエローニモが自殺を試みようとするまさにその瞬間に地震が発生する場面である。時間の経過に即した語順を基調にし、詳細な状況設定を導入する主文はあたかも映像を見るかのようにであるが、ここでもそれに続く"als"以下で予測不能な出来事、すなわち、地震が起こる。さきほどの引用と同様に、"als"以下による突然の変異はなるほど主文と副文の間に意味の断絶を生じさせ、それゆえに読者は緊張を強いられることになる。つまり、これは読者を作品のなかに引きこみ、テキストへの参加をうながすという意味で効果的な表現であるといえる。しかし、それと同時に重要なのは、断絶したふたつの出来事が"als"で接続されるこの構文によってひとつの文に統合されているということであろう。

『決闘』の場合もこれらと類似した用法といえるのではないだろうか。気ごろのしれた知人と宴を楽しんでいる最中に、公爵夫人の使いの訪問をうけるとは赤鬚伯も考えなかったにちがいない。しかもこれがかれにとってはその後決定的な出来事となる。主語につづく関係文において副詞"eben"がもちいられることにより、"als"以下の出来事が赤鬚伯には不意のものであったことが強調され、まったく異なるふたつの状況がこの接続詞によって結びつけられる。『チリの地震』からの引用が長くなったが、構造的な主題である"als"によって語り手は決定的な主題の転換を主文の内部においてかくもさりげなく、しかも劇的に表現しているといえる。

いわゆる主語には主題、主語、行為者といった機能があるのを瞥見したが、われわれはここで行為者の問題にもどることにしよう。うえで"der Graf"を行為者とする主文と"der Ritter"を行為

者とする接続詞文とが"als"によって対照的に結合されているのをみた。この対照が強調されているということは、ふたつの文における行為者とそれとともにもちいられている動詞句とを比較することでもあきらかになる。しばしば指摘されるように、主語と述語の関係は文を構成する要であり、したがって主語の機能を明確にするには述部をも検討せざるをえない。¹³ そこでつぎにどの行為者にいかなる性質の動詞がもちいられているかをみてみることにしたい。

(1) において"der Graf"には"aufstehen"が、"der Ritter"には"eintreten"がそれぞれもちいられていて、いずれも動きをあらわす動作動詞であるという意味ではかわりない。ただ、動きの性質が対照的であることが注意をひく。このことはそれぞれの前つづりに端的にあらわれているといえる。いうまでもなく"auf"は「上昇する運動方向」を強調し、"ein"はとりわけ「内側へ」の方向をしめす。¹⁴ G・レイコフは認知意味論の立場から「Above (上方) の意義」について「経路のない静的な意義をもつ」と指摘し、その特徴のひとつとして非接触性をあげている。¹⁵ いすに腰を下ろしていた伯が立ちあがるという行為は、まさに接触から非接触へ移行するということにはかならない。それにたいして、騎士には"ein-"というある対象にたいしてきわめて積極的な動きをしめす前つづりが使用されている。最初の出会いですでにふたりの関係が対照的な前つづりによって暗示されているのである。

また、伯爵を取りまく状況をしめす関係文"der eben mit einer Gesellschaft von Freunden bei der Tafel saß,"において状態動詞である"sitzen"が使用されているのも注目値する。それというのも、この関係文のなかで作品における伯爵の位置がさきほどの前つづりの例と同様にかなり明確に表現されているようにおもえるからである。「慇懃に」騎士を迎える余裕をみせるが、しかし、じつはごく親しいもののまえでしか優位に立つことのできない伯爵のほんらいのありかたを、この動詞が選択されることによって読者はつよく感じるのではないだろうか。気心の知れたものと座していた("sitzen")伯爵は、騎士の登場("eintreten")により席を立ち("aufstehen")、それまでの平穏を唐突に崩されることになる。これ以後、伯爵と騎士の側との緊張関係は作品を貫くものとなるが、ここでは語手がそれを「静的な」動詞と「動的」な動詞でもって巧みに暗示しているといえよう。

3. 2. 2.

(2) aber kaum, während die Freunde den feierlichen Mann, der sich nicht niederlassen wollte, betrachteten, hatte er in der Wölbung des Fensters den Brief

¹³ W. Schmidt (1983: 248ff.)

¹⁴ Duden (1998: 466)

¹⁵ Lakoff (1987: 524)

überlesen: als er die Farbe wechselte, und die Papiere mit den Worten den Freunden übergab:

(2) はひとつの主文、三つの副文からなる従属的複合文であり、これが文の複雑な原因ともなっている。時をしめす副文はいずれも状況語として機能していて、同時性をあらわすものである。この文においても語り手は動詞にいたるまでの先行構造を複雑にすることで読者にたいしてレーマの提示を遅らせている。それによってここでも読者に緊張をあたえる効果をもつ。

ハリデーによると接続詞は義務的な主題となる。¹⁶ したがって、引用における"aber"も主題として機能しているといえよう。第一文において、赤鬚伯と騎士の側の状況の逆転が統語と語彙の両方のうちに暗示されているのをみたが、その逆転がこの第二文で具体的にしめされることになる。

ハリデーは主題と主語が一致する場合を「無標の主題」、一致しない場合を「有標の主題」として区別し、接続詞に有標の主題がつづくことをきわめて例外的な現象であるとする。むろんドイツ語と英語は異なる文法体系をもつが、ドイツ語においてもやはり同様の傾向があるといえよう。したがって、引用にみられるように"aber"の直後に有標の主題である副詞"kaum"が配置されていることは通常の語法からは逸脱しており、語り手にそうするだけの動機があるようにおもわれる。そして、この動機はテキストの線状性と関係していると考えられる。

さきに(2)を一般的に記述したが、この文においては同時性をしめす接続詞、すなわち"während"、"als"が支配的であり、さまざまな要素をはらんだ一瞬が一文のうちに表現されているかのようにみえる。主題を選択することで語り手の脳裏にはすでに自身が語りたいことの全体像があり、それを一度に表現しようとしたのかもしれない。しかし、いずれにせよ、それはテキストの重要な特質のひとつである線状性にそってなされなければならない。いうまでもなく、話しことばであろうと、書きことばであろうと、発話は線状的になされる。それでは、『決闘』の語り手は同時性を意味する接続詞をもちいながらいかにして出来事を線状的に語るのだろうか。

結論からいえば、テキスト上の空間的進行と時に関する副詞、接続詞の出現する順序は一致しているといえる。「ほどなく(kaum)」赤鬚伯は騎士の持参した手紙に目を走らせる一方で、赤鬚伯の友人たちは腰をおろそうとしない騎士を観察している。その後、赤鬚伯は顔色を変え、知人にその手紙を手渡す。通常ではありえない接続詞と有標の主題との結合は、じつは、テキストの線状性を考慮した結果であったといえる。これにより読者はあたかも映像をみるかのように時間

¹⁶ Halliday (1994: 50ff.)

的連鎖をリアルに感じることができるのである。

ここで主題から主語へと視点をかえてみよう。(1)において文頭におかれ、しかも述語動詞から隔離されていた主題・主語'*der Graf*'は(2)では人称代名詞'*er*'となってあらわれる。隔離されていた主語がのちに人称代名詞によってうけられるということは、戯曲作品、散文作品を問わず、クライストにあつてはめずらしいことではない。典型的なものとして『ペンテジレーア (*Penthesilea*)』(1808年)からつぎの箇所をあげておこう。

Achilleus, der, wie man im Heer versichert,
Sie bloß ins Feld gerufen, um freiwillig
Im Kampf, der junge Tor, ihr zu erliegen:
Denn *erauch*, o wie mächtig sind die Götter!
Er liebte sie, gerührt von ihrer Jugend,
Zu Dianas Tempel folgen wollt er ihr:
Er naht sich ihr, voll süßer Ahndungen,
Und läßt die Freunde hinter sich zurück. (2618-2625)

「軍のなかでたしかだといわれている話によると、
アキレウスがあの子を戦場に呼びよせたのは愚かにもみずからすすんで
戦いにおいてかのじょに負けてしまうためだったのです、
なぜなら、かれのほうもまた—ああ、なんと強大な神々のお力でしょう！—
かれもまたあの子を愛していたからなのです。かのじょの青春の輝きに心を動かされて、
かのじょについて女神ディアナスの殿堂まで行くつもりだったのです。
かれは甘い期待に胸をふくらませながら、あの子に近づいてゆきました。
そして友人たちをあとに残していったのです」

引用はアマゾン軍のメロエが自軍の女王ペンテジレーアのみならず、敵軍のアキレウスまでもが恋に落ちていたことを報告する場面である。"*Achilleus*"という主語でメロエは報告しはじめるが、その後のかのじょのことばは主語につづく言述に含まれた複雑な諸要素で混乱しているかのようである。このような隔離した主語によって生じる一種の破格構文は、主語"*Achilleus*"が人称代名詞'*er*'でうけられることによってかろうじてテキスト内の統一をたもっている。H・トゥルクもいうように、ここで興味ぶかいは広範におよぶ挿入によって表現される事象が、もっぱら隔離した主語として提示された"*Achilleus*"に関係づけられているということである。その結果、

あらゆる意味連関は主語において先取りされているような印象が生じることになる。¹⁷

おなじことが『決闘』についてもいえる。(1)において強調されていた"der Graf"は主語であると同時に主題でもあった。しかるに、(2)の主文においては主題にはならず文をかううじてつなぎとめるかすがいにすぎなくなる。あらゆる意味連関はやはり伯を中心になされているのであるが、普通名詞から人称代名詞へのヴァリエーションに赤鬚伯の立場の変化が反映されているのではないだろうか。

この節をしめくくるにあたって、(2)における主述関係を赤鬚伯に限定してみておこう。ここでまず確認しておきたいのは、"er (der Graf)"が行為者であり、それと結びつく動詞が"überlesen"、"wechseln"、"übergeben"だということである。つまり、(1)と比較すればあきらかのように、(2)にみられる動詞はいずれも自動詞ではなく他動詞である。「他動性」をもった動詞は「文法的主語からみて(・・・)目的に向けられるところの出来事」をしめすといわれるように、¹⁸ 主体が対象に積極的にはたらきかけるという意味を含みもつ。したがって、これらの動作には行為者の動機がその根底にあるということが前提となる。(1)においては移動をあらゆる自動詞が中心となっており、いわば外からみた行動があたかもカメラのレンズをとおして描写されているかのような印象をあたえていた。だが、(2)においては(1)とおなじく行為が語り手によって描写されながらも、そこに作中人物の内面が反映しているかのような印象をあたえる。¹⁹ この意味で決定的なのは、**"als er die Farbe wechselte, und die Papiere mit den Worten den Freunden übergab"**の前半部である。戯曲、小説を問わず、クライストの作品のほとんどで登場人物は赤面し、しかもそれが決定的な出来事として描写される。『決闘』にもそのような赤面が二ヶ所みられるが、ここの引用はそのうちのひとつである。クライスト作品における身振りとしての赤面という問題を論じたD・スクロツキーは、赤面という象徴的身振りをおもに「はづかしさ」(Scham)の点から論じているが、²⁰ ここではむしろ赤鬚伯の怒りを表現しているようにおもわれる。赤鬚伯の「顔色が変わる」のではなく、「かれ(赤鬚伯)が顔色をかえる」という表現からかなり意識的な赤面であることがわかり、したがって、積極的な怒りの気持が強調されることになる。スクロツキーの研究がしめしているようにクライスト作品における赤面の機能は多岐にわたっており即断は避けなければならないが、すくなくともここで確認できるのは、(1)から(2)への移行において、物語は外面から内面へと傾きつつあるということである。

¹⁷ Turk (1968: 55)

¹⁸ W. Schmidt (1983: 201)

¹⁹ vgl. Conrady (1951: 85)

²⁰ vgl. Skrotzki (1971) ただし、『決闘』についてはほとんどふれていない。

3. 2. 3.

(3) **Brüder, seht! welch eine schändliche Anklage, auf den Mord meines Bruders, wider mich zusammengeschmiedet worden ist!**

この文は赤鬚伯の直接話法のみによって、すなわち命令文と感嘆文からなっている。この命令文は眼前の人にたいする要求をあらわして、ほんらいその自明性のゆえに省略されることの多い要求の向けられる相手**"Brüder!"**が文頭におかれている。それにたいして、感嘆文はあいだに前置詞句が挿入されていて命令文よりはいくぶん複雑な構造になっている。

ここでもまずは主題についてみてみよう。ハリデーは命令文における主題についてつぎのようにいっている。「命令法は、述語（動詞）が規則的に主題になる唯一の節タイプである」²¹。ドイツ語も英語と同様に文頭に動詞がおかれることで命令文が成立するから、そのようにいうことができよう。しかし、すでにあきらかなように、(3)は動詞ではなく、要求の向けられる人への呼びかけ、つまり有標の主題ではじまっている。有標の主題の基本的機能は、「その節のメッセージのためのある種の局所的な意味環境をしめすか、対照という特性をしめす」²² ことにある。騎士の登場により分が悪くなった赤鬚伯は有標の主題によってなんとか自身の形勢を立てなおそうとする。それゆえに**"Brüder"**という主題を選択することで、赤鬚伯は「諸君」ならば公爵夫人（あるいはその使者たる騎士）とはちがい以下のわたしのメッセージを信じてくれることであろう、という説得の意味をこめて友人たちに呼びかけるのである。

感嘆文においては感嘆要素として機能する名詞群か副詞群が典型的な無標の主題になるという。²³ その意味で、(3)の感嘆文は通常の主題構造をもつといえよう。ただ、ここで注意したいのは、この文が**"welch ein(e)"**によって導入されているということである。**"welch ein(e)"**はいうまでもなく、疑問詞**"welcher"**のヴァリエーションであり、「個別的集合体のなかのどの要素かを聞き出す」**"welcher"**の意味を踏襲して、**"welch ein(e)"**も「個別的集合体のなかよりひとつの要素を強調的にとりだす」という意味をもつ。そして、それが感嘆文でもちいられると「当該要素の肯定的、否定的特性」を強調することになり、話者の対象にたいする態度がつよく前面におしだされることになる。²⁴ (1)から(2)への移行が外面から内面への変化であったとすれば、(3)ではその傾向がさらに強化されるのではないか、ということをこの直接話法による感嘆文の出だしによって読者は予感することができるのである。

²¹ Halliday (1994: 47f)

²² ebd. S.48

²³ ebd.

²⁴ Helbig / Buscha (1977: 401f) 引用頁は翻訳による。

さらに、この感嘆文が受動態の構文であることに注意したい。受動態はしばしば文体指標となるものであるが、ドゥーデンは受動態のもつテキスト機能をつぎのように記述している。「それ（動作受動）のおかげで話し手・書き手は、伝達のパースペクティブを自身の意図に応じて展開させることができる。つまり、発話における対格目的語をテーマ化すること、述語と行為者をレマ化することによって」。²⁵（3）の感嘆文においてはついに抽象名詞である"Anklage"が主語の位置をしめることになる。赤鬚伯にとっては公爵夫人ではなく、まさにこの「はずべき非難」そのものが問題なのである。"welch ein(e)"による否定的特性の強調、それに拍車をかけるかのような否定的な意味をもつ名詞句、そしてこれらの要素を強調する受動態構文、これらを選択することで語り手は赤鬚伯がみずからの潔白を主張し、周囲の人びとを自陣にとりこもうとする姿を露骨にしめそうとするのである。しかし、逆に考えれば、このような語彙、構文による自己弁明はむしろ、騎士の登場により生じた赤鬚伯の動揺を表現しているともいえよう。この直後にかれの友人が「不安げに」かれを取り囲むのも、伯のこの弁解のスタイルのうちにかれの欺瞞を感じていたからではないだろうか。

3. 2. 4.

(4) Er nahm dem Ritter, mit einem funkelnden Blick, den Pfeil aus der Hand, und setzte, die Vernichtung seiner Seele verbergend, inzwischen die Freunde sich unruhig um ihn versammelten, hinzu:

まずこの文の構造をおおまかに記述しておくことにしよう。ここではふたつの主文が並列の接続詞"und"で結合された並列複合文が基本となっていて、前半部には前置詞句、後半部には分詞句と同時性をしめす副文が挿入されている。主文では"er" (der Graf)が主語であり、これは同時に主題でもある。副文の"die Freunde"も主語であり、主題となっている。ここではさきほどの直接話法から語り手のことばへと変わっている。(1)から(3)に移行するうちに赤鬚伯は窮地に追いこまれ、それと並行するかのように文法的にも無標の主題の座からひきずりおろされた。しかし、(4)の主文において赤鬚伯は行為者としてふたたび無標の主題となっている。とはいえ、それに対応するのは"nehmen"といったごくありきたりの動詞と、発言過程を表現する動詞"hinzusetzen"といったものであり、これらはおおまかなハンドリングを表現しているにすぎない。したがって、引用(4)に関しては主語からすこし離れてクライストの文体的特徴のひとつといえる挿入を中心にみてみることにしたい。

²⁵ Duden (1998: 176)

赤鬚伯はふたたび主導権を獲得したかのように、あるいは再度優位に立とうとするかのように騎士の手から矢をもぎとる。この様子を語り手は主語、述語動詞、所有の与格（むろん、この段階ではこれが所有の与格か動詞の与格目的語かを決定することはできない）を続けざまに語る。だが、その直後にまたもや前置詞句"mit einem funkelnden Blick"が挿入され、主文は中断を余儀なくされる。これまでの経過をたどってきた読者は、赤鬚伯と騎士との関係が緊張にみちたものであるのを知っている。赤鬚伯が主題として提示され、そのあとに騎士が与格としてあらわれたとき、読者はこの両者がそのあとはたしてどうなるのかということに期待をふくらませるにちがいない。だが、そのような読者の期待をはぐらかすかのように前置詞句が挿入されるのである。挿入(Parenthese)という修辞法はいうまでもなく古代の修辞学より伝わる技法であり文体にもおおきな作用をおよぼす。これまで挿入はたんにそれによってへだてられた要素間に緊張を喚起するのがおもな機能であるとされてきたが、近年の言語学の発展により、コミュニケーションの観点からべつの光があてられるようになった。語用論の立場からみると、挿入は第二のコミュニケーションレベルの構築を示唆するものとなる。つまり、話し手は挿入によって一次テキストからすこし距離をおいて語ることが可能となる。²⁶ クライストの文体は客観的であるといわれるが、それは語り手によるこのような介入が挿入というかたちでなされるために目立たないからではないだろうか。ここに挿入される"mit einem funkelnden Blick"も全知の語り手のフィルターをとおした描写であろう。すくなくとも、当の本人が"mit einem funkelnden Blick"であることを確認することはできないのだから。ここでは騎士から矢を奪いかえすという単純なハンドリングの描写とそれにとまなう語り手の観察との間にある落差が効果的であるといえる。

引用の後半はふたつの挿入が並置されており一種の漸増法となっている。したがって述語動詞と前つづりがそれによっておおきくへだてられることになり、いっそうの緊張がうみだされている。

まず最初にみられる挿入句"die Vernichtung seiner Seele verbergend"をみることにしよう。ここでも語り手は"die Vernichtung seiner Seele verbergend"を挿入することで赤鬚伯の内面を描写し、一次テキストから逸脱させることで同時に強調している。さらに、ここでは分詞句にもさまざまな機能があることに注意しなければならない。たとえば、G・ヘルビヒ/J・ブッシュは分詞句が「一定の副詞類文に対応する意味関係が分詞句と主文の間に成立することもある」と述べ、以下のような用法をあげている。(1) 様態的、(2) 時間的、(3) 因果的、(4) 条件的（接続詞をもちいる場合ともちいない場合がある）、(5) 認容的（接続詞が不可欠）。²⁷ "die Vernichtung seiner Seele verbergend"は主文(er) setzte, (...), hinzuの下位に属する。ここでは

²⁶ Plett (2000: 139f.)

²⁷ Helbig / Buscha (1977: 707f.)

「かれの魂の破滅を隠しながら」というように時間的な意味で分詞句を解釈するのがおそらくふつうだろう。じっさい、このように解釈する翻訳もある。しかし、読者にはもうひとつの読みの可能性が残されているのではないだろうか。つまり、この分詞句を因果的に読む可能性である。赤鬚伯は、公爵夫人の使いである騎士の登場によって自身の企てたブライザッハ公爵の暗殺がひょっとすると知られたのではあるまいか、との不安にとりつかれ、知人たちに身の潔白を声高に叫ぶような人物である。そのようなかれであれば、「かれの魂の破滅を隠したからこそ」、「確かにこの矢はわしのものだ。聖レミーギウスの当夜、わしが城をあけていた点も認めざるを得ない」と開きなおることができたのではないだろうか。

つぎに挿入されるのが時をしめす副文"*inzwischen die Freunde sich unruhig um ihn versammelten*"である。この文においては"*die Freunde*"が主語であり行為者でもある。ここで注目したいのは、この"*die Freunde*"にもちいられている動詞が"*versammeln*"だということである。この動詞は通常"*in versammeln*"という他動詞構文で用いられ、「集める、集合させる」（小学館『独和大辞典』）を意味する。しかし、ここでは再帰的に用いられていることに注意したい。シュミットのいうように、再帰的用法の動詞は、能動態とも受動態とも異なる。能動態においては、行為は主語からはじまり、客観的現実の場にその作用が向けられる。受動態は行為が外側から文の主語にむけられる。だが、再帰はこれらのいずれでもない。再帰的用法の文においては、外側への作用も外側からの作用も存在しない。²⁸ つまり、「活動性が主語の領域にとどまっていて、（ほんらいなら）支配的な過程が内的なそれへと変化するのである」。²⁹ 行為者である"*die Freunde*"は、赤鬚伯に"*Brüder, seht!*"と語りかけられる。しかし、かれらはそのような語りかけがあたかも無駄であったかのように、ただ「不安げに」赤鬚伯のまわりに集まる。"*die Freunde*"にはたしかに動作動詞をともなっているが、きわめて消極的にうつる。それはかれらにもちいられる動詞が再帰的用法であるためである。また、主人公を取り囲む大衆が積極的な振るまいをすることはこれ以外の箇所でもないというのも興味ぶかい。かれらはつねに主人公を相対化する背景として機能しているのであり、動詞の再帰的用法といった語法の選択はそれを効果的に表現する手段のひとつとなっているのである。

3. 2. 5.

(5) daß in der Tat das Geschoß sein gehöre und auch der Umstand, daß er in der Nacht des heiligen Remigius aus seinem Schloß abwesend gewesen, gegründet sei!

²⁸ W. Schmidt (1983: 210ff.)

²⁹ Brinkmann (1959: 218)

(3)は直接話法によって赤鬚伯のことがそのまま描写されていたが、(5)は間接話法で構成されており、先行する主文"und (er) setzte, ..., hinzu"の目的語となっている。主語には物質名詞である"das Geschoß"と抽象名詞"der Umstand"がおかれている。いうまでもなく、間接話法は作中の話者の、すなわちここでは赤鬚伯の、ことがそのことばどおりに表現したものではなく、語り手が要約したものである。しかし、にもかかわらず興味ぶかいは、赤鬚伯の発話内容をしめす"das"文章の主語が物質名詞であり、また抽象名詞だということなのである。引用テキスト中もとても劇的であるといえる、赤鬚伯の直接話法において"eine (...) Anklage"という抽象名詞が主語になっていたのも偶然ではない。騎士による手紙を読んでからというもの、赤鬚伯はこと疑惑に関する話題を提供するときは自身が行為者となって積極的にふるまうことがない。

「かれが矢をもっていた」のではなく「矢がかれに属していた」のであり、「聖レミーギウスの当夜、かれが城をあけていたのを認める」のではなく「聖レミーギウスの当夜、かれが城をあけていたという状況が認められる」、ということばにそのことが端的に表現されている。たしかに、赤鬚伯は開きなおりそれぞれの事実を認める。しかし、その弁解のしかたたるやおよそ誠実とはいえない。諸悪の根源は自分以外に存在するというようなものはいないのだ。このような言い訳のしかたに「かれの魂の破滅(die Vernichtung seiner Seele)」がうかがわれるのではないだろうか。

4. むすび

本稿において、全集版にしたかだか数十ページにすぎないクライストの『決闘』という短編の、しかもそのうちのほんの数行をのみ抜粋し、おもにいわゆる主語という観点から分析してきた。主人公のひとり赤鬚伯は、引用(1)においては余裕をもって客人である騎士を迎え入れることができた。だが、騎士の持参した公爵夫人の手紙に目を通すやいなや、伯爵は自身の企てたブライザッハ公の暗殺がかのじよに気づかれたのではないかという不安、またその不安を払拭しようとするがゆえの激昂にとらえられ、それまでの優越感はどこかへ消えてしまう。この経緯が主語の用法にもあらわれているのはうえてみたとおりである。最後に、それを補うという意味で赤鬚伯と騎士のヴァリエーションにふれてむすびとしたい。

引用したテキストにおける中心人物はいうまでもなく赤鬚伯と騎士である。この両者の変奏は、かれらの力関係を如実にしめしているようにおもわれる。名詞句あるいは人称代名詞に限定してみよう。最初から順にしめすと、赤鬚伯は、"der Graf"→"ihm"→"er"→"er"→"mich"→"er"→"er"とその姿を変える。それにたいし、騎士は"der Ritter"→"den feierlichen Mann"→"dem Ritter"→"ihn"と変化する。前者は最初に名詞句で導入されたあと、つねに人称代名詞でテクス

トにあらわれる。これはテキストの経済性、つまり、旧情報は短く、新情報は長くという経済性にかかっており、むしろ自然な現象であるといえる。だが騎士はそのような経済性に反している。最初に名詞句により導入されるのは赤鬚伯とおなじであるが、その後のヴァリエーションは注目に値する。とりわけ、"den feierlichen Mann"という評価をあらわす形容詞が付加された名詞句は、赤鬚伯のヴァリエーションと対照的であるといえよう。一度だけ普通名詞で登場し、あとは人称代名詞におきかえられる赤鬚伯、普通名詞からさらなる普通名詞へと変貌をとげる騎士。語り手はどうやら最初から両者の関係を暗示しているかのようだ。赤鬚伯から騎士の側へと移行する力関係は、いわゆる主語の用法のみならず、これらのヴァリエーションにも反映しているといえよう。しばしば指摘されるように、『決闘』は分析的技法で組み立てられており、それが濠的効果を生んでもいる。しかし、だからといって最初から解明の手がかりが読者に与えられていないわけではない。J・シュミットもいうように、暗殺者をほのめかすシグナルは冒頭からすでに語り手によって発せられているのである。³⁰ 『決闘』の冒頭近くでみられる力関係の逆転は主題・主語・行為者においてすでに暗示されていたのであるが、これはのちのクライマックスである神前裁判での「決闘」の結果を示唆するという点でも意義が大きい。

³⁰ J. Schmidt (2003: 288)

文献一覧

- Brinkmann, H. (1959): *Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung*. Düsseldorf.
- Conrady, K. O. (1951): *Der Zweikampf. Zur Aussageweise Heinrichs von Kleist*. In: *Der Deutschunterricht*, H. 6, S. 85-96.
- Duden (1998): *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. 6., neu bearbeitete Aufl. Mannheim.
- Erben, J. (1984): *Deutsche Syntax. Eine Einführung*. Bern.
- Erben, J. (1980): *Deutsche Grammatik. Ein Abriß*. 12. Aufl. München.
- Halliday, M.A.K. (1994): *An Introduction to Functional Grammar*. London.
- Helbig, G / J. Buscha (1977): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. 4., durchgesehene Aufl. Leipzig. 〈在間進 (訳) (1982) 『現代ドイツ文法』 三修社〉
- Hentschel, E / Weydt, H. (1990): *Handbuch der deutschen Grammatik*. Berlin, New York. 〈西本美彦・高田博行・河崎靖 (訳) (1994) 『現代のドイツ文法の解説』 同学社〉
- Heringer, H. J. (1989): *Lesen lehren lernen: Eine rezeptive Grammatik des Deutschen*. Tübingen.
- Heringer, H. J. (1995): *Grammatik und Stil. Praktische Grammatik des Deutschen*. Berlin.
- Lakoff, G. (1987): *Women, Fire, and Dangerous Things ----- What Categories Reveal about the Mind*. Chicago. 〈池上嘉彦・河上誓作 他 (訳) (1998) 『認知意味論－言語から見た人間の心』 紀伊国屋書店〉

Plett, H. F. (2000): *Systematische Rhetorik. Konzepte und Analysen*. München.

Schmidt, J. (2003): *Heinrich von Kleist. Die Dramen und Erzählungen in ihrer Epoche*. Darmstadt.

Schmidt, W. (1983): *Grundfragen der deutschen Grammatik. Eine Einführung in die funktionale Sprachlehre*. 6. Aufl. Berlin.

Staiger, E. (1948): *Heinrich von Kleist. "Das Bettelweib von Locarno". Zum Problem des dramatischen Stils*. In: Staiger: *Meisterwerke deutscher Sprache aus dem neunzehnten Jahrhundert*. 2., verm. Aufl. Zürich.

Strotzki, D. (1971): *Die Gebärde des Errötens im Werk Heinrich von Kleists*. Marburg / Lahn.

Turk, H. (1968): *Dramensprache als gesprochene Sprache. Untersuchung zu Kleists "Penthesilea"*. Diss. Berlin.

ウスペンスキー、B. (1979): 「芸術テキストの《枠》」北岡誠司訳：『現代思想』1979年2月号所収。

廣川智貴(2000): 文体論の理論と実践—クライストの『ロカルノの女乞食』を例にして：京都大学大学院独文研究室『研究報告』第14号 2000年 1~17頁所収

Stilistik des Subjekts

— Am Beispiel von Kleists „Der Zweikampf“ —

HIROKAWA Tomoki

Die Absicht dieser Arbeit besteht darin, den Anfang der Erzählung „Der Zweikampf“ von Heinrich von Kleists im Rahmen seiner Stilistik zu analysieren. Die Untersuchung beschränkt sich dabei auf den Gebrauch des Subjekts.

Es heißt immer wieder, daß „Der Zweikampf“ eine analytische Handlungsstruktur habe. Aber der Erzähler gibt von Anfang an genug Signale, die auf den Täter, Graf Jacob den Rotbart, hinweisen. Diese Signale lassen sich am Gebrauch des Subjekts erkennen.

Der englische Linguist M. A. K. Halliday klassifiziert das Subjekt nach folgenden drei Funktionen:

1. Psychological Subject (Thema)
2. Grammatical Subject (Subject)
3. Logical Subject (Actor)

Wenn man in diesem Rahmen nun den „Zweikampf“ analysiert, dann kann man auf verschiedene stilistische Eigentümlichkeiten in dieser Erzählung hinweisen:

1. Das getrennte Subjekt (als Thema). Dramatisierend wirkt dieser Stil, weil dem Subjekt nicht sofort ein Rhema folgt.
2. „Als“ als „structural Theme“. Die Verwendung von „als“ in den Erzählungen Kleists zieht die Aufmerksamkeit der Leser an. Eigentlich hat diese Konjunktion eine temporale Bedeutung. Aber der Kleistsche Erzähler verwendet „als“ oft mit Abstufungspartikeln (noch, schon, kaum) und

temporalen Adverbien (eben, schon). Damit zeigt sich der Wechsel der Beziehung zwischen Jacob und dem Ritter.

3. Die Beziehung des Subjekts (als Actor) zum Prädikat. Der Graf als Subjekt wird mit den trennbaren und Zustandsverben, die eine negative Bedeutung haben, kombiniert, der Ritter mit den positiven trennbaren Verben. Darin zeigt sich auch die Beziehung der beiden.

4. Das Subjekt im Ausrufesatz und Imperativsatz. Dieses stilistische Mittel zeigt die innere Seite des Grafen, die seine mißliche Situation andeutet.

5. Stoffname und Abstraktum als Subjekt. Es ist bemerkenswert, daß Stoffname und Abstraktum in der indirekten Rede des Grafen stehen. Damit hebt der Erzähler dessen eilige Rechtfertigung hervor.

Auch diese Weise spielt der Erzähler mit dem Gebrauch des Subjekts auf den Täter, den Grafen, an.